「一人残らず４５分間学び続ける授業」の日常化をめざして

三春町立三春小学校
教諭　原田　由香里

１　実践の内容及び方法等

本校は、学校教育目標を「『強く』『正しく』『美しく』～『明徳の精神』（くもりのない立派な徳性）を基調とした、未来に生きる人間性豊かな子どもの育成～」と掲げ、目指す児童像を「明るく元気な子ども（強く）」「学び続ける子ども（正しく）」「心をみがく子ども（美しく）」として、教育課程全体を通して取り組んでいる。

「学び続ける子ども（正しく）」では、「主体的に取り組み課題を解決しようとする子ども」「協働的に学習に取り組む子ども」の育成に重点に置き、日々の授業改善を図っている。麻布教育研究所の永島孝嗣先生を学校教育アドバイザーとして招聘し、ご指導をいただきながら「一人残らず４５分間学び続ける授業の日常化」をめざし、校内研究を進めて４年目となった。また、「三春小スタンダード」として、ユニバーサルデザインの考えによる学習の基盤づくりも長年継続して取り組んでいる。

（１）日常の授業の質的改善を図る授業研究会

本校では、授業研究会を従来の「教師の指導方法」を協議する授業研究ではなく、「子どもの学ぶ姿から学ぶ」授業研究として位置付けている。授業の中で一人一人がどのように学んでいるか、全員の学びはどう進んでいるかを捉えることができるようにするための授業研究とし、自らの「子どもの学びを見る目」を鍛えるトレーニングとして臨んでいる。学級の子ども全員に対し「〇分付近、何人学んでいて、何人学べていない」かという、従来より、より正確で精密な判断が日々の授業準備を支えるとともに、授業中その場で必要なことを見極め、適切に支援することができるようになる、という考え方による。

①　授業研究会の方法

- 全職員が参観することを基本とする。全職員で一つの授業を見て協同的に「子どもから学ぶ」授業研究とする。
- 授業研究の日常化を目指し、月１回以上の授業研究会を計画。４月・９月・１月の学校教育アドバイザー訪問による授業研究会も含め、年 15 回実施。子どもから学び続けることで子どもの学びを促進する。
- 事前研究会は実施しない。指導案の作成も行わない。授業提供者の準備物は参観者に配付する座席表、本時の授業内容（１文程度）のみ。特別な準備を行った授業ではなく、日常の授業で授業研究を行う。また、授業を変えるチャレンジは、研究授業の日ではなく、普段の授業で行う。
- 参観者は、子どもたちの学びを邪魔しない。話しかけたりせず、観察に徹する。
- 子ども全員（一人一人、固有名詞で）が４５分間「学んでいるか、学んでいないか」を見る自らの判断のトレーニングとして臨むようにする。

②　研究協議（事後研究会）の視点・方法

- 授業の進め方、発問の仕方など、教師の視点ではなく、そのときの子どもから何を学んだのかを、参観者一人一人が語る。子どもの表情や言動に着目し、子どもの学ぶ姿から、その授業でその子にとってどのような学びが成立していたかを協議する。

・グループ協議（１５分）では、今日の子どもの学ぶ姿から教師自身が学んだことや、解釈できなかった子どもの事実についても共有する。
・全体協議では全員が発言する（一人３０秒）。子どもの名前を必ず出して、その子から学んだこと、授業を見る前には知らなかった事実を語る。自分が見た事実を語り、全体で共有することで、その授業の全貌が見えてくる。
・自評は行わない。全体協議後、授業者は協議の中で出た子どもの事実の中で、自分が気付いていなかった事実に絞って語る。

【研究協議の視点～児童の学びの事実から～】
・何もしていない時間、待っている時間が長い子は誰か。最大で何人いたか。その時刻は、何分付近か。
・仲間が大切だと感じていた子は誰か。何人か。
・取り組むプロセスの中で、〇〇さんに、先生のねらい以外の学びは何が生まれていたか。
・先生が個別支援をしているとき、その子以外で学んでいない子は何人だったか。
・授業後も学び続けようとしていたのは、誰か。それはなぜか。　など

（２）質の高い課題への取り組み

①「ジャンプの課題」の設定

三春町では東京大学名誉教授の佐藤学先生をお招きし「三春町教育講演会」を開催、協同学習の授業では「共有の学び」（教科書レベル）と「ジャンプの学び」（教科書以上のレベル）の２つの課題で協同的学びを組織することをご指導いただいた。本校でも日々の授業において、どのような課題ならば子どもたちに学びが生まれるのかを意識して「ジャンプの課題」の設定を取り入れている。

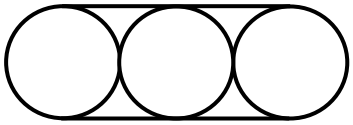
【ジャンプの課題とは】
・より高いレベルの問題に出合うことで、多様な考え方に出合い、友達と助け合ったり、協同の学びの良さを味わったりすることができるような課題。
・その課題の解決が見られなくても、それを考えることによって基礎的概念を習得し、ねらいに到達していくもの。

ジャンプの課題は、今までの「基礎から発展へ」学習する展開ではなく、「発展から基礎へ」という概念で子どもたちに学力をつけさせるものである。できる子にとって有意義であるだけではなく、できない子にとっても、「みんなも解けない」「能力差は少ない」と思わせ、子どもたちを「対等」にし、学ぶ意欲をかきたてるものである。教科書問題をアレンジしたり、1 学年上の教科書や中学校入試問題などから、レベルの高い問題を探したりし、クラスの実態に合わせて取り組みを進めている。

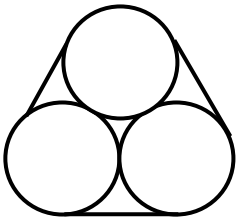
【実践例①】５年算数「割合」
〈教科書（東京書籍）問題〉
「筆箱の仕入れの値段は 600 円です。利益を 30%加えて売ります。売る値段はいくらですか。」
⇒〈アレンジしたジャンプの課題〉
「仕入れの値段が 600 円の筆箱に、30%の利益を加えて売ったところ、利益の合計が 900 円になりました。この筆箱は何個売れましたか。」

【実践例②】５年算数「円周の長さ」
「半径３ｃｍの空き缶３つをテープでまとめます。図ア、図イのようにまとめる時、必要なテープの長さはどちらが何ｃｍ長いですか。」

図ア



図イ



② 教師の役割

「ジャンプの課題」を設定し、一人一人が学び続けるために、教師の関わり方について意識を変えるように学校全体で取り組んできた。

・一人では解けないものを「仲間」や「教材」とつなげる。
・「個別支援」ではなく、「仲間とつなぐ」支援をする。教師が入ることで、ペアやグループのつながりを切らないようにする。
・子ども一人一人が自分のペースで学び続けられるように、教師が手出し・口出しするのではなく、「モノ」（教材・資料・課題など）による支援に徹する。
・４５分授業の１割～１割５分（７分程度）は教師が教える時間。残りの時間は子どもたちが自分のペースで学ぶ時間とする。その教える時間は、最初でも最後でもなく、子どもたちの様子を見ながら、即興的に、内容を含め判断する。

（３）安心して学び合える学級環境づくり

① 学習形態の工夫

本校では昨年度より全学級で学習形態を変え、学び合える環境づくりに取り組んできた。
・低学年…コの字型またはペアにして、対話による学び（ペア学習）をたくさん経験させる。
・中学年以上…３～４人グループの机配置。３年生の始めは、実態に応じてペアを取り入れてもよいこととする。

テストの時以外は常にペア・グループの学習形態にすることにより、子どもたちを一人にしない学びを意識している。分からないときは隣の友達の考えを見たり、「分からないから教えて」と言ったりしやすくなり、友達と関わり合いがもてるようにすることで、学びが深まると考える。

② 安心して関わり合える学級づくり

ペア・グループの学習形態にしても、「分からない」と素直に言える学級、一緒に考えられる関係づくりができていなければ、学び合いは成立しない。日頃から互いに話を聴き合い、認め合える学級づくりを意識して取り組んでいる。話の聴き方など授業中の学び方のルール（「友達が話につまったら、一緒に考えたり、続きを想像したりしよう」など）を提示したり、互いの良さを伝え合う場面を多く設けたりし、友達と安心して関わり合えるよう支援している。

（4）三春小スタンダード

ユニバーサルデザインの考え方に基づき、どの子にとっても学びやすい環境を整えられるよう、共通して取り組んでいる。

【三春小スタンダード（一部抜粋）】
（1）教室環境整備
・教室前面の掲示は極力シンプルにする。
→「学級のめあて」は教室後方上、「既習事項」「係活動」等は教室側面に
・「声のものさし」「気持ちの温度計」「あったかことば・ちくちくことば」の掲示
・「学習の流れ」「一日の時間割」をホワイトボードで示す。
・板書の仕方の共通理解
（2）学習ルールの設定
・学用品のルール、机上の整え方
・発達段階に応じた話し合いの仕方の例示

2　実践の成果

「子どもの学ぶ姿から学ぶ」授業研究会の実践を通し、教師側の意識の変化とともに、子どもたちの学びに向かう姿に変化が見られるようになった。昨年度の児童アンケートからは、「友達と話し合ったり、助け合ったりしながら勉強している。」「自分のめあてや課題意識をもって、学習に取り組んでいる」という項目で肯定的回答が増えており、他者と関わり合う学びの中、自分なりの課題を明確にもちながら、解決まで粘り強く取り組むことができる児童が増えたと考えられる。

【今年度の成果～先生方のアンケートから抜粋～】
・学んでいるか、学んでいないか、という視点で研究授業に参加したため、自分の学級で子どもを見る時の視点が変わってきた。いろいろな子を見よう、細かいところまで見ようとするようになった。
・自分の授業において一人で全員を見るのには限界があるが、授業研究会の参加を通し、意識して見ようとするようになった。
・子どもたちのグループでの関わりが活発になってきた。
・ジャンプ問題の必然性を感じ、自分でも取り組んでみようという意欲が高まった。
・今までよりも難易度の高い課題を提示すると、子どもたちはやる気が高まり、しっかりと解決できることが分かった。

3　課題及び今後の取り組みの方向性

学校教育アドバイザーの永島先生から「1 日 1 授業は挑戦を。挑戦の頻度を上げ、今までのプラス１０分でできる挑戦を何回も行い、その失敗を毎日同僚と分かち合うように。」とご指導を受けている。「ジャンプの課題」についても、難易度の設定が難しく、全員が夢中になって学び続ける課題作り、また、課題解決に向けた資料の内容の充実や精選を図ることが課題である。「子どもを見る目」を鍛えることも、一人ではできず、授業研究会を通して様々な見方を学んでいく。互いの授業を気楽に日常的に５分程度でも見合えることを取り入れたり、授業や学級づくりでうまくいったこと、いかなかったことをもっと職員間で共有したりし、協同的に研究を進めていく必要がある。今後も「一人残らず４５分間学び続ける授業」の実践のため研鑽を重ね、子どもも、教師もともに学び合いながら成長できる学校を目指し、研修主任として学校全体で取り組みを進めていきたい。